

最後の〈紙〉の百科『世界大百科事典』

平凡社執行役員 関口秀紀

はじめまして、平凡社の関口です。

最初に、私は編集者ですので、大体いつも原稿や本を読んでいるとか、人と会うのでも著者やデザイナーの方とか同僚の編集者ですとか、個々別々にお会いしてお話することはあるのですが、このように一遍に皆さんから注目されてお話をする経験はほとんどありません。きょうは非常にあがっています。話があっちにいたりこっちにいたりするかもしれませんが、ご容赦願いたいと思います。

千代田図書館の河合さんからお話を伺いながら、平凡社としてどんな話ができるかなと考えました。現在、平凡社では新書も文庫の類もあって様々な本を出していますけれど、1914年の創業以来、やはり百科事典といえば平凡社といわれますように、「百科」は社の中心をなす出版物でありました。その百科事典がどのような考え方で、あるいはどのような歴史があって、そしてどうやって作られてきたかということをお話できるのではないかと思います。たまたま私は、その百科事典の編集部にはほぼ最初の時点で配属されて、ここにある『世界大百科事典』が完成するまで編集部におりました。ただし、すでにウン十年前の話になりますので、忘れてしまっていることも多々ありますし、点であっても線にならないかもしれません。とはいえ、どんな状況でこの事典を作ってきたかということは、ある程度はお話できるかと思います。それでは自己紹介から始めさせていただきます。

関口秀紀：自己紹介

1977年に平凡社入社ですから、以来、32年平凡社で勤務をしております。私が入社したとき、平凡社の社屋は、千代田区四番町にありました。数年経って同じ千代田区の三番町に変わり、1990年代に目黒区の碑文谷に引っ越し、21世紀になった2001年に現在の文京区の白山に移りました。私は転勤もないのに社屋自体は4回も移ったわけですね（笑）百科事典ということであれば、入社したときはすでに、この『世界大百科事典』の準備が進んでいるところでした。私が最初に配属されたのは年鑑の編集部です。年鑑というのはどういうものかといいますと、一度百科事典が出れば、それ以降は紙という制約がありますので、なかなか改訂ができません。そこでそれ以降の出来事を1年で区切って、年鑑（イヤブックス）という形で補遺をしていくわけです。新聞社などでも昔、『朝日年鑑』とか『読売年鑑』とかありましたよね。当時、平凡社では『百科年鑑』というのを出して、その編集部配属されたのです。

1977年の春、1カ月ほどの研修のあと、連休明けに配属先にいくと、みんなほとんど何もしていないんですよ。何でこの人たちは仕事をしないんだろうと、青雲の志に燃えていた私はとても腹が立ったわけです。後で聞くと、要するに年鑑というのは1年の1月～12月までのことをまとめるわけで、したがって12月が終わらないと本格的な編集が始まらないんですね。ですから年が明けてから3月に本が出るまでの間はものすごく忙しい。結局、私が配属されたときは、私の先輩たちは3月に本を出し終えて、皆ポーっとしていたときだったんですね。ほとんど酒を飲んでいました。そんなことがありまして、私は非常に悪い癖をつけられて、仕事をしないで酒だけ飲むというのが、身につ

いてしまいました（笑）以降30年、そういう形で編集者をやっております。

入社したての最初のころについては、いろいろ記憶があります。1977年～79年ぐらいまで年鑑の編集部にいたときは、例えばキャンディーズの解散（78年）があったのを記憶しています。それを記事にしたわけですが、じつはあの真ん中にいた伊藤蘭さん、“ランちゃん”ですね、彼女は私と同学年なんですよ。あのときは感慨がありました。自分はこれからいくつになるまで仕事をするのかわかりませんが、この人はもう引退しちゃうんだなと思っていましたね。そんな当時のいろんな記憶が蘇ってきます。先ほども申しましたように夏から秋ぐらいまで年鑑の編集部というのは基本的に何もすることがありません。データを集めたりはしていますが、それぞれの執筆者に原稿を依頼するのは秋以降ですから。そうすると他の先輩が、“裏作”とっていましたが、要するに本来の年鑑を作るほかに単行本の編集をやるわけです。そのとき編集したのがイギリスのテムズ・アンド・ハドソンという出版社から出ていた「アート・アンド・イマジネーション」（邦題は「イメージの博物誌」というシリーズです。今でいう精神世界・オカルティズムの本ですが、例えば『魔術』ですと澁澤龍彦さんが訳者であったり、『錬金術』は種村季弘さんが、『占星術』は私が担当したけれども矢島文夫さんが訳者であったりというような、錚々たるメンバーでやっていたシリーズでした。百科事典の年鑑の編集部という、ちょっと変則的な編集部に所属したお陰で、そういう貴重な経験ができたというのが、私の大きな出発点であったと思っています。

そのときのエピソードを1つご紹介いたします。あるとき、おもしろい方から連絡があったのです。その人は寺山修司です。彼は「イメージの博物誌」がイギリスで出版されているときに現地で本を見て知っていたんですね。それで平凡社からそういうシリーズの翻訳が開始したことを知って、自分で寺山版のイメージの博物誌を作りたいと連絡をしてきたわけです。それで、その当時の寺山修司の視覚的な集大成を作ろうと、演劇はもちろんですが、映画、写真も彼は撮っていましたので、そういったものを集めた『寺山修司の仮面画報』を出版しました。これは、私が入社して2年目のことで、私自身にとっても非常にいい経験になった本でした。寺山さんが亡くなって二十数年経ちますが、この本は今でも版を重ねています。ある時期、新装版にしましたが、1979年が初刷ですので、今年で30年目を迎えます。ご興味のある方はぜひ注文してください。それと、寺山修司さんに関わるもう1つのエピソードをご紹介しましょう。寺山さんに初めてお会いしたときのことでした。あるレストランにご案内したのですが、その椅子はたぶんデザイン優先の椅子で形がちょっと変わっていたんでしょうね。寺山さんが最初に発した言葉が「ああ、これは座ることを拒否する椅子ですね」でした。そのときに、後で申し上げますが、私は学生のときに芝居をやっていたりしたものですから、ああ、寺山修司が本当にここに居るんだと、そのとき23歳の自分が非常に感動したのを今でも覚えています。

さて、1979年、いよいよ百科事典の編集部に配属されました。百科事典の編集部というのは、学問の分野に準じて、編集部もさまざまな分野ごとにつくられています。まずは、大きく、文科系と理科系の編集部に分かれます。大体出身の大学の専攻に準じて担当も決めることが多かったと思います。細かい分野はそれぞれがいくつか重複して担当しました。私は出身が経済学部でしたけれど配属されたのは、いわゆる「衣・食・住、そして遊び、スポーツ」いった分野の編集部でした。社内ではこれを「生活文化」系と称していました。文科系はもう少し大きくいうと、政治や経済の社会科学系と、歴史、芸術などの人文科学系、そして今申し上げた生活文化系というふうに大きく3つの編集部に分かれています。ただし、私は、なぜか演劇の分野も担当しました。それは私が学生のときに芝居をやっていたとポロッと漏らしてしまったからのようです。それからスポーツとか遊びも担当しました。これもポロッと、自分は小学校のときからスポーツの記録をつけるのが好きで、陸上とか水泳の記録を自分なりにずっとつけていたんです。って会社で言いましたら、「じゃあ、おまえ、スポーツをやれ」ということになったのです。それとなぜだか仏教の分野も担当しました。これは人文科学系ですよ。実は私は学生のときに経済を勉強するのが嫌で嫌で、芝居をやったり、古いお寺へ行って仏像を見るなんてことをしていたんです。当時、大学で古寺仏研究会というサークルに入っていました。そこに同級生で学部は違いましたが、今活躍をしている作家で井沢元彦という男がいました。今でも『週刊ポスト』で「逆説の日本史」を書いています。実は、あのもとなっているのは、学生のときの古寺仏研究会なんですよ。私も一緒に寺巡りをしていたんですけれどもね。そんなことを、これまた会社で話したら、「じゃあ、おまえ、仏教を担当せよ」ということになってしまいました。途中でまた、教育、マスコミと担当も替わっていましたが、複数の担当を持って、それぞれの著者に会いにいきました。

さて、百科事典では著者の方でも、それぞれの分野で項目選定委員、編集委員を組織していました。百科事典の第1巻目の冒頭のところには、どなたにどういう分野で項目選定委員になっていただいたかという一覧表が出ています。

トータルで500人ぐらいの方に編集委員、あるいは項目選定委員をお願いしていたと思います。そういう方たちと、最初は項目を確定していく、さらに一つひとつの項目について、どういう内容で、どのぐらいの分量で書いていただくかを決めていく。それからその項目をどういう執筆者に書いてもらうかを確定していくという段階を踏んで、執筆の具体的な依頼に入っていくわけです。そういうことを繰り返し、繰り返し、1980年代の前半は過ごしていました。そうして『大百科事典』という黄色い表紙の全16巻の百科事典を1985年に刊行いたしました。もしかしたら皆さんの中にもご自宅にお持ちの方がいらっしゃるかもしれませんね。今から25年近く前になります。その百科事典を改訂して、1988年に『世界大百科事典』を出しました。二つの大きな違いは、『大百科事典』のほうは全ページモノクロだったのに対し、『世界大百科事典』はカラー図版を入れたことです。これは当時、百科事典の競争がありまして、小学館さんの『ジャポニカ』という百科事典が、同じぐらいの規模で同時期に刊行されたということがありました。他社と百科をめぐる競争になった。お恥ずかしい話なのですが、私どもは図版をカラーで入れていくというところまで至らなかったというのが現状でした。しかし、その3年後にそういったことをすべて仕上げまして、1988年、ほぼ20年前に現在刊行されている『世界大百科事典』という商品を出すことができました。

ということで私は最初のほぼ10年、1977年に入社して88年にこの百科事典が出ましたので、大体10年ぐらいを、百科事典を中心にした編集生活で過ごしたことになります。

さて、百科事典が終わると何十人も関わっていた編集者の手が空きます。ですので、一部の編集者は新しく書籍を作っていく部署に、他の編集者は百科事典以外の事典を作る部署に配属されました。私自身も『能・狂言事典』という事典を手がけました。名前のとおり能と狂言についての、総合的な事典です。それから、先ほど仏教ということを申しあげましたけれども、『世界宗教大事典』という単行事典も担当しました。あとは、例えば『アメリカを知る事典』、『東南アジアを知る事典』といった、我々は「〇〇を知る事典」と言っていますが、〇〇に地域名、国名が入った、いわゆるエリア事典を何冊か作る作業に関わりました。

その後、私自身でいえば、1993年に創刊された「平凡社ライブラリー」という、文庫と新書の間ぐらいの本ですが、その編集長を2回やりました。1980年代後半から1990年代は、百科事典から離れて書籍を中心にした編集者として暮らしてきましたけれど、1998年（平成10年）に編集部長を拝命して、百科事典を含む事典の類を、再び担当するということになりました。去年、2008年になりますが、平凡社事典制作センターという、百科事典の改訂作業を中心にする会社をつくりまして、そこにも現在関わっておりますので、また、百科事典に返り咲いて、しかも本日のような百科事典についてのお話をさせていただいているということになります。さて、次に平凡社とはどんな会社なのか？という話に入らせていただきます。

平凡社とは、どんな出版社？

平凡社は1914年（大正3年）に創業されました。創業者は下中彌三郎で、教育者でもあった人です。その理想は「万人労働の教育」です。人はすべて働きながら学び、学びながら働かなければならない。そのために百科事典も必要であろうということなのです。最初に出したのが『や、此は便利だ』という本で、これはタイトルのとおり、いろいろな新聞の言葉の解説とか、読みづらい漢字の読み方とか、今だったらテレビのクイズ番組のネタ本になるかもしれないような、そういったものを分かりやすく解いている事典で、これが大正3年に出てベストセラーになったんですね。わずか2年ちょっとで大増補して24版になっていますから、当時としては破格に売れたのではないかと思います。この成功によって平凡社は出発しました。事典を作ることで出発した会社でした。ただし、戦前は、昭和になってすぐですが、「現代大衆文学全集」というような、いわゆる文学ものも出しています。これは“円本”といわれ、1円で本が買えるというものでした。改造社などもだいたい作っていたと思いますが、その頃を出版史では円本時代といっています。実は戦前はこういった本もたくさん出していました。「怪奇〇〇全集」とか、「江戸川乱歩全集」とか、現在の平凡社のイメージと少し違うかなというようなものも出していました。

そして1931年に東大の心理学者の木村久一という人を編集長に据えて、『大百科事典』が刊行になります。完結は1935年です。この『大百科事典』は、戦前の日本文化の1つの到達点といわれているようですが、それが平凡社の大きな方向を指し示したものであったのです。この『大百科事典』の「事典」に注目してください。事典の「事」の字を見ていただければわかるように、我々はこれを「ことてん」と言っています。日本では、今では基本的にエンサイ

クロペディア的な事典には「事典」を使うわけです。一方、ディクショナリーの「辞典」のほうは、我々は「ことばてん」と言いまして、「辞」を使います。今でも出版社によっては両方使っているところもあります。ただし、いわゆる百科事典にはほとんど「事典」が使われるようになって、それが定着したのがこの『大百科事典』のときでした。戦後は、『大百科事典』を基にしてさまざまな事典の類を出版していきます。『社会科事典』、『家庭科事典』とか。また瀬田貞二編集長の下での『児童百科事典』はその当時、斬新な児童百科であるというお墨付きをいただきました。そんな、事典を中心とした出版社になっていったのです。

さて、創業40周年というところで、ちょうど私が生まれたころですが、『世界大百科事典』が構想されました。1955年ぐらいから具体的に編集が始まって、59年に完結しております。これは林達夫氏が編集長をしたもので、内部的には「林百科」と呼んでいます。それに対して今の『世界大百科事典』は加藤周一氏が編集長のもので、惜しくも昨年お亡くなりになりましたけれども、加藤周一編集長の下で、私自身も編集部の一員として働きました。こちらは「加藤百科」と言っております。1950年代に『世界大百科事典』として出た「林百科」は、「世界史的な視野に立って、先進国のみならず後進諸国の諸文化をも軽視せずに取り上げる。特にアジアに関しては欧米の事典の追随を許さない内容を盛り込んだもの」であるとうたわれたように、アジアを見据えた日本の百科事典、むしろ、欧米中心というよりも日本やアジアに目を向けた百科事典ということが大きな特色です。この百科は20世紀前半の文化の到達点であったといわれ、日本でその後作られる百科事典の基本的な方向は、この『世界大百科事典』（「林百科」）が作ったと、とりあえずいわれていると思います。

それから1960年代には、それよりも少し規模の小さい『国民百科事典』というようなものも作ったりしています。この頃は、百科事典だけでなく、ご記憶の方も多と思いますけれども、1963年には日本で初めての本格的なグラフィックの月刊誌であった『太陽』を創刊しました。同じ63年に「東洋文庫」も創刊しています。日本をはじめとして中国等アジア、中東の古典を中心としたものを入れていこうというのが「東洋文庫」です。ですから、一方で雑誌としての『太陽』、そして一方で古典的なものを入れる文庫としての「東洋文庫」が走り始めました。残念ながら、月刊誌としての『太陽』は今休刊になっていますが、「東洋文庫」のほうは現在七百八十数巻、800巻に近いところまでできております。あまり目立たないかもしれませんが、ひっそりと毎月1冊刊行しています。40年以上かけてそこまで到達したということです。

そして、ちょうど40年前の1969年に、これはいわゆる「小百科」といわれているものですが、『アポロ百科事典』が出ています。当時、アメリカのアポロ計画があったと思いますが、時代を反映して“アポロ”という名前を付けたんですね。

1972年には『別冊太陽』を創刊。これは今でも毎月出ていますが、月刊太陽とは別に創刊しました。いわゆるムックというものの先駆けになったものです。

その後、事典以外でもさまざまなシリーズを出しています。『中国石窟』は中国の出版社と提携して出したものです。あるいは荒俣宏氏に中心になってもらった『世界大博物図鑑』であるとか、『動物大百科事典』、あるいは各県の歴史地名を県ごとに出していった『日本歴史地名体系』など。この『日本歴史地名体系』のシリーズは1970年代の初頭に刊行が始まり、私が入社した77年にはすでに編集が佳境に入っていましたが、全48巻が完結したのは、なんと2004年、ついこの間です。三十数年編集に時をかけて完成にこぎつけました。百科事典を作っていると気が長くなるんですが、そうした歴史をもつシリーズが百科以外にもあるのです。

そして、先ほどご説明したように、1988年に現在の『世界大百科事典』が完結します。1990年代に入りますと、1993年には「平凡社ライブラリー」が創刊されて、いよいよ平凡社も軽い方向のものも出すようになります。これは出版界の大きな流れでもあると思いますけれども、当時、岩波書店で「同時代ライブラリー」を出していて、小学館、NHKからも「小学館ライブラリー」、「NHKライブラリー」が出ており、「平凡社ライブラリー」もそこに合わせて創刊したのです。今は岩波さんや小学館さんはやめてしまい、平凡社のみが作り続けています。このシリーズには本の背に聖堂の薔薇窓を模したシンボルマークが付いているので、そこが目印になるかと思います。今後、それが「平凡社ライブラリー」だということをご記憶いただければ幸いです。

それから漢字の神様といわれる白川静先生の『字統』、『字訓』、『字通』の「字書3部作」が出たのも1990年代です。一方で、アラーキーこと荒木経惟さんの『荒木経惟写真全集』全20巻も出しています。荒木さんは、「太陽賞」の第1回の受賞者です。「太陽賞」は残念ながら今はないのですが、写真界の芥川賞、直木賞ともいわれた写真界の登竜門の

賞で、平凡社が設定したものでした。荒木さんはいつも自分を語る時に「おれは第1回の太陽賞受賞者だ」というふうにおっしゃっていただいていますけど。

1999年に「平凡社新書」が創刊になります。当時は、岩波新書、中公新書、講談社の現代新書という老舗のほかに、他の出版社からもどんどん新書が出ている時期だったと思いますが、そういう中で、平凡社でもやはり新書という形のペーパーバックを出していく必要があるだろうということで出し始めました。1999年の創刊ですので、2009年の今年で10周年になりました。10周年を画期として新装版にしていこうということで、以前は赤と白のカバーを付けていたんですが、5月から空色と白のカバーに変わっています。合言葉は「知の〈十字路〉から〈広場〉へ」です。そうした形で平凡社でもだんだんペーパーバックをたくさん出すようになってきましたが、もちろん単行本の出版も盛んで、歴史関係、芸術関係などを中心にしてさまざまなものを出しています。

そして、2年前の2007年には現在販売している改訂新版『世界大百科事典』を出しました。いわゆる紙の重々しい総合的百科事典というのは現時点では、日本では平凡社1社だけが刊行を続けているのです。以上、駆け足で、平凡社がどういう出版社で、百科事典がどういうものか、そして平凡社の様々な出版物についてご説明してきました。

百科事典とは？

さて、百科事典とはどんなものかお話ししましょう。『世界大百科事典』の中に「百科事典」という項目がありますので、それを読みますと、「人類の所有する諸知識を、特定の配列方法（我々の場合は50音順）によって収録し、読者の全般的もしくは特殊な使用に供することを目的とした著作物」とあります。元々のencyclo(p)aediaという言葉は、ギリシア語のenkykliosという「円環をなす」という意味の言葉と、paideiaという「教育・訓練」という意味の言葉が合成されたもので、〈知識の環〉とか〈体系的教育〉というような意味になります。

西洋でいえば『博物誌』（大プリニウス、79年）に始まって、ずっと歴史があるわけです。近代的な百科事典の基というのはデイドロとダランベールたちの『百科全書』（1751～66年）で、これはフランスの百科全書派が作った百科事典です。執筆者が二百六十数名いたようですが、いわゆる明確な編集方針の下に、分類もある一定の学問的な分類に従って作り上げられた百科事典ということで、この『百科全書』のあたりが近代的な百科事典の基になったといわれています。その後、日本でもお馴染みの『ブリタニカ百科事典』（1768～71年）が当初イギリスで、その後アメリカに資本が移りましたが、18世紀に始まります。そしてドイツでいうと『 Brockhaus 百科事典』（1796～1808年）、『マイヤー百科事典』（1840～52年）といった百科事典が出ています。フランスでは『19世紀ラルース大百科事典』（1866～76年）というようなものも19世紀に入ると出されるようになって、現代に続いていくということになるかと思えます。

中国を見ますと、『爾雅』というのは孔子の作ともいわれているようですが、紀元前5世紀に作られた最古の字書といわれています。中国では、百科事典に当たるものは「類書」といわれています。類書というのがずっと中国の伝統にあって、そういったものが脈々と受け継がれています。ある執筆者がいて、ある項目を執筆するというのがいわゆる西洋型の百科事典であるのに対して、類書というのは元の本があるわけです。だから、「何々によれば、何々である」というものを、ある分類に従ってもってくるわけです。執筆者が責任をもってそれを書いたというのではなくて、この本によればこうなっている、というのが類書ということになります。これが中国のいわゆる百科事典の伝統であって、『淮南子』（劉安、2世紀）とか、『芸文類聚』（624年）、『太平御覧』（977年）などに脈々とそうした伝統が続いていくことになります。もう1つ、『太平御覧』というタイトルにあるように、類書の類がなぜ作成されたかということ、中国においては基本的には時の皇帝にお見せするという役割を中心にして作られたものであったからのようなのです。

ここに『和漢三才図会』を持ってきましたが、明の時代に王圻という人が『三才図会』（1607年）というのを作って、これが中国でいうと、近代の百科事典に近くなっていくところの境目であったようです。近代になってから中国でも、いわゆる西洋的な百科事典の編集が当然考えられるようになります。それは、例えば1959年の時点で計画されたのですが、そのときは刊行されませんでした。その後『中国大百科全書』という名前の、近代的な百科事典が1980年に刊行が開始されているようですので、日本よりも相当時代が新しい。類書の伝統は古いけれども、今でいう百科事典というのは非常に新しいということであるようです。

日本も当然、中国の影響の下にありますので、『秘府略』（滋野貞主、9世紀）というものが日本の百科事典的なもの

のの最初だといわれているようですが、その前にも中国の類書は輸入されていました。日本人が書いたものとしては、菅原道真の『類聚国史』（892年）とか、源順の『和名類聚抄』（10世紀）といったものが百科事典の基になります。江戸時代になると近代に近づいてくるということで、日本最初の絵入り百科事典として『訓蒙図彙』（中村惕斎）というのが17世紀にできたり、近世の百科事典の代表だといわれている『和漢三才図会』（寺島良安、1713年）ができてきて、いよいよ日本も近代に突入していきます。ちなみに『和漢三才図会』は東洋文庫の中に18冊分で収められています。

近代にも、これをご存知の方はたくさんいると思いますが、『古事類苑』（西村茂樹）というのが明治時代になって作られています。これは1879年に計画されて1913年までかかっていますが、昔の類書の伝統に則った百科事典です。したがって、日本でも近代に至るまで類書の伝統があったということです。

欧米式の最初の事典は、明治の最初に政府の要請によってE・チェンバーズの『百科事典』を翻訳していた時代があったようですが、日本の百科事典としては同文館の『大日本百科辞書』というのが最初だといわれています。1901年に発表されています。ところが、やはり百科事典というのは出すのが大変だということになるとと思いますが、同文館は1912年に倒産してしまい、これは最終的なところまで至りませんでした。同じように三省堂でも『日本百科大辞典』というのが1902年に開始されて、大隈重信が総裁になって大々的に始まったようですが、これももたずに1912年に倒産してしまったということです。百科事典を作るというのは、その当時からなかなか大変な事業であったということがお分かりいただけると思います。そして、先ほどの「平凡社とは？」の中での説明につながるのです。平凡社で『大百科事典』（1931～35年）が戦前に出て、戦後に林達夫編集長の『世界大百科事典』（1955～59年）が出て、続いて加藤周一編集長の下で、最終的には『改訂新版・世界大百科事典』（1988年）という名前が出ていたというのが現時点の状況です。

『世界大百科事典』はどのように作られたのか？

『世界大百科事典』はどのような方針でできているか。これが私は一番重要なことだと思います。百科事典というのはさまざまにありますけれども、このことを私はきょう皆さまにお話したかったのです。加藤編集長の『世界大百科事典』の編集方針は次のようなものです。読み上げていきます。

〈世界大百科事典〉の編集方針について。

[現代は情報が多すぎて、また少なすぎる時代である]

一般の市民は、新聞・雑誌・書籍・電波メディアの伝える情報の、いわば洪水のなかで暮らしている。限られた時間のなかで、どういう本を読むべきか、選択は必ずしも容易でない。しかも情報の量は、どの領域でも急速に増大し、新しい事実が知られ、新しい概念が導入され、新しい仮説が提案される。非専門家ばかりでなく、専門の研究者にとつてさえも、追いついてゆくことがむずかしいだろう。

このような情報量の増大とその広範な伝達が成り立つための条件の一つが、政府機関や大企業が経営する大きな組織の活動であることは、いうまでもない。したがって、市民が受け取る情報のなかには、政治的または商業的な目的のために操作されたものもある。

受取り側は、どう反応することができるだろうか。もし右往左往して、しかも受身に操られることを望まないとするれば、多すぎる情報を整理しなければならないし、特にみずからの立場に従って整理しなければならないだろう。

情報または知識の蓄積の、もう一つの条件は、専門化である。研究者や技術者は、いよいよ細分化された領域で、またその領域でのみ仕事をする。そこでは、同じ領域の専門家の間でしか通用しない特殊な術語の体系も発達する。彼らの話は、素人にはわかりにくい。またたとえわかって、市民が個人的にも、社会的にも、知りたいと思う事物の全体ではなくて、一面を語るにすぎない。情報の洪水のなかで、ほんとうに知りたいことについては、利用することのできる情報が、あまりにも少ないということになる。

そういう情報の不足に対応するためには、知りたい対象の全体を念頭におきながら、部分的な情報をまとめてゆくほかはない。また専門家に、情報の正確さを犠牲にしないままに、しかもわかりやすく話すくふうを求めるほかはないだろう。

百科事典が、このような現代社会の要請に応じるためには、従来の百科事典の改訂ではなくて、まったく新たに編集の方針そのものを考えなおす必要がある。(この事典は、そういうまったく新しい編集方針でできています。…関口説明、以下 () 内も同様) この百科事典が、多すぎる情報を整理し、細分化された知識をまとめ、専門家の表現を非専門家にわかりやすくするために採用した方針は、次のようなものである。

[整理のために]

1——知識の体系については、中心的な概念の説明を重んじ、技術についてはその原理を重んじた。たとえばコンピューターについて、論理回路の意味を懇切ていねいに解説し、その技術的な細部や応用範囲をできるだけ簡潔に述べる。これは幹と枝葉とをはっきり区別するということである。たとえ枝葉にめざましい変化があっても幹は変わらないから、この方針は、日進月歩の領域で、この事典の記述が古くならないということをも意味するだろう。

2——事典は執筆者または編集者の意見を発表するための機関ではない。しかし特定の立場をとらずに情報を整理することはできないだろう。(つまり編集方針の要に何をおくかということ、これが重要ですが) この事典が基本的な立場としたのは、平和と民主主義と人権の擁護である。(これがこの『世界大百科事典』の大基本方針です。)

3——また地域的には、日本を中心として、(これは「林百科」でもそういわれていたと思いますが) 近きより遠きへ及ぼした。項目は、日本に近いほど多く、記述は、原則として、日本とのかかわりの深いほど詳細である。たとえば朝鮮半島の歴史・文化・社会にかかわる項目は、過去および現在の日本語によるあらゆる百科事典のそれよりも、はるかに多くを採る。(つまり日本に近いところは非常に厚く項目が採られているということです。) また、たとえば西洋の人物や事件については、その日本とのかかわり(作品の翻訳、事件の影響など)をできるかぎり詳しく述べる。(つまり日本とのかかわりがどうであったかをできるかぎり詳しく書いてもらうことをモットーとしています。)

4——整理とは分類であるが、この事典での分類は、必ずしも従来の慣習に従わず、しばしば叙述の効率を基準として、新しい分け方を用いた。たとえば、〈アメリカ合衆国〉という国名での記述を抑えて、(というのは、昔であればアメリカ合衆国というのが新書1冊分ぐらい長くあったわけですが、そうではなくて) 地域や大都市の項目の記述を豊富にする。(国別で記述されるという重要性はあるわけですが、国別だけでは収まりきれない記述というものが出てきます。) この方法は、またたとえばアフリカ大陸についても有効であろう。国境の意味は、人種的・文化的・言語学的・宗教的に、必ずしも決定的ではない。(今でもアフリカには、昔の宗主国が分けた国境があるわけで、国名別だけで記述をすることはなかなかできないということがありますので、そのことを念頭において整理と分類をしていったということです。次の[まとめのために]が重要です。)

[まとめのために]

1——同じ地域の問題を扱うのに、専門領域を異にする委員会の学際的討議を重んじた。互いに関係のない専門的知識の並列ではなくて、その間の関係を求め、対象の全体が見失われないように努めたのである。(これはどういうことかということ、今までの百科事典というのは、当然、学問体系の縦の分類で我々の編集部も区切るんですね。政治、経済、法律、そして歴史。その歴史も西洋史、東洋史、日本史。日本史も古代史、中世史、近世史というふうに分けていきます。そのことはひとつ重要なことではありますが、それだけで区切ったものが従来の百科事典の記述、あるいは項目の分類にも反映されてきました。でも、その分類と分類の狭間にも百科事典はさまざまな項目があるはずなんです。そういう項目が落ちていくわけです。むしろ、その領域と領域の間にあるような項目が実は重要であったりするわけです。そのことを踏まえて、同じアメリカでも、アメリカの文学史の方、アメリカの政治の方、アメリカの経済の方というように、何人か専門的に領域の違う人たちに集まってもらって、どういう項目を採るべきかを話し合ってもらいました。これを我々は内部で「エリアシステム」と言っていました。そのことをまとめのところで加藤編集長は話しているわけです。)

2——また地域に限らず、他の項目、特にたとえば動植物の名前などについても学際的な記述を重んじた。したがってこの事典は、動物学者の述べる〈鶴〉に満足せず、同時に民俗学者の語る日本の伝説のなかでの〈鶴〉を併記する。〈鶴〉の知識を、たとえば《夕鶴》の理解にも役立つようにまとめようとした。(動植物の項目というのは、人名の項目とか地名の項目と並んで百科事典の基本的な項目になりますが、従来は、例えば「ツル 鶴 crane」が動物学的にどういう動物なのかという説明があって、大体それで終わるわけです。そうではなくて、今回の百科事典は、そこに例えば民俗的な記述、民俗学の中でツルというのがどういう役割を果たしてきたのか、ツルが人間にとってどういう役割をし、どう考えられてきて、どのように表現されてきたのか、ということまでもが、「ツル」という項目で

分かるようになってきているということ、ここで言っているわけです。)

3——事実と仮説とを区別したうえでそれを関連づけ、歴史と伝説とを峻別したうえでその関係を説明しようとした。伝説の重要性には特別な注意を払う。たとえば歴史的事実のほとんど何も知られていない小野小町や弁慶の伝説的人物としての役割を詳述する。(どういうことかという、たとえば「小野小町」は今回すごく長い項目になっています。ですけれども、歴史的な事実としては、この中の「平安時代前期の女流歌人。生没年不詳。六歌仙、三十六歌仙の一人。…系図については諸説あるが、確かなことは不明。小町の名についても、…諸説ある。」という記述くらいで、ほとんどが不明で分からないわけです。ですから、おそらく普通の百科事典的な記述でいうと10行ぐらいで項目が終わる。しかし、今回は、そこから小野小町という人間が日本人にとってどういう存在になっていったかということが、その後に書かれるわけです。ここが肝心の点です。例えば男の在原業平は美男の典型ですが、それに対して美女の典型である小野小町がその後の日本の文化の中でどういう役割をして、どのような位置づけになってきたのかということがざあーっと書かれている。このことのほうが日本の文化を考えると、あるいは文学を考えると重要なのですね。謡曲などでは「○○小町」という曲が7つぐらいあるわけですが、そういったところに小野小町は伝説化されて大きな存在として反映されていくということを、今回の百科事典では注目したということが、ここに書かれているわけです。時間の都合で少し端折りますが、最後はこのような言葉で締めくくられています。)

この事典は、専門領域以外の事物について、早く、正確な情報を得たいと思う日本国民のだれでも利用することのできる道具である。道具が役にたつだろうことを切に願う。(これはそういうことの道具として役立ててもらえればいいんだということを行っているわけです。そうした形でできている百科事典です。)

なぜ今、〈紙〉の百科事典か？

デジタルが全盛のこの時代に、なぜ今、〈紙〉の百科事典なのか？ 皆さん、ネット上のフリーの百科事典ウィキペディアがあるのではないかとおっしゃるだろうと思いますので、そこを取って申し上げようと思います。平凡社のPR誌『月刊百科』に書いていただいた佐藤優氏の文章をご紹介します。彼はいつも「起訴休職外務事務官」という肩書きを使っていますよね。『獄中記』とか『国家の罨』というような本を出して、「国策捜査」という言葉を流行らせた佐藤優さんに今回の『世界大百科事典』について書いてもらった一部を引用させていただきます。驚くべきことに彼はなんと、中学時代と高校時代に1回ずつ『世界大百科事典』を通読したというんですね。

(佐藤優氏の文章を読みながら。文中の()は関口のコメント)

「私は百科事典の魅力にすっかり取り憑かれてしまい、結局、中学生時代、高校生時代に1回ずつ、『世界大百科事典』全35巻を通読した。」(これはちょっとすごいんですけども、たまにいるんですね、こういう人が。その彼が、このインターネット時代に、それでも何で紙の百科事典かということを書いているので、これも私がごちゃごちゃ話すよりも、彼の文章を読んでいただくのがいいと思います。)

「父が私にこの百科事典を買ってくれた頃は、インターネット時代の到来を誰も予測していなかった。インターネットの〈ウィキペディア〉で、情報はただで手に入れることができるので、高価で、場所ふさぎの百科事典を買う必要などないという意見もときどき耳にするが、私の見解ではこれは少なくとも三つの理由で間違っている。第一の理由は、「ウィキペディア」などの誰もが書き込むことができるインターネット百科事典は、編集権が不在であることだ。『世界大百科事典』の場合、老舗出版社である平凡社が社運をかけて、優れた編集チームを作って(ありがたい言葉です)、当該分野の第一人者に執筆を依頼している。もし、間違えた記述や、不適切な解説があった場合、責任を負う者や法人がある表現物とそうでない表現物は、信憑性が根本的に異なる。第二の理由は、人間は基本的にケチな動物なので、自分でカネを出した書物(今は税込みで28万3500円で買えます。まあ、これを買ったら使わなければ損というのは正直なところだと思います)に書かれている内容は、タダの情報よりも身につくからだ。私のところにも多数の献本が来るが、ほんとうに読みたいと思う本については、献本は友人に寄贈し、別途、近所の本屋で同じ本を買う。その方が内容が記憶によく定着するのである。第三の理由は、より哲学的なものだ。インターネットの情報は、書き込みによって肥大していく。常に更新されていくのは、最新情報を手に入れるという観点では確かに便利である。しかし、それでは、〈百科事典(エンクロペディー)〉が本来果たそうとした機能が果たせないのである。百科事典の目的は、単なる物知り辞書ではない。歴史のある時点で切断し、その時点での体系知の構造を提示するのが本来の目的なのだ。

要するに、百科事典に収録されている内容は、その時点での、当該言語を使う文化圏での、独自の体系知を提示することである。(それができるのは、やはり〈紙〉の百科事典であろうということ、ここでお話いただいているわけです。そして最後に…) 本来、百科事典編纂作業は国家プロジェクトとして行うべきであるが、平凡社の力量(これが非常に非力なんですけれども)に日本国家が甘えているということなのであろう。実際、『世界大百科事典』の内容は、ロシアが国家プロジェクトで作成した百科事典に匹敵する。」

とまで書いていただいたので、とても頭が下がります。だいぶヨイショしていただいていると思いますが、こういう形で百科事典が作られているということをご承知おきいただければありがたいと思います。しかしながら、百科事典は今のデジタル時代にどうなっていくのかということが一方であるわけです。平凡社としても、そのことを見据えて、今後どのような形になるかはまだ分かりませんが、デジタルの形を利用して、さまざまに百科事典を編集していくことの検討を始めたところです。

平凡社は今まで大きくは3回、1930年代と1950年代、1980年代に大きい百科事典を作ってきました。大体、30年に1回、百科事典を作っていて、最後に作った百科事典がすでに20年ほど経っていますので、この10年の間に、これはデジタルを使ったものにせざるを得ないのですが、そうした百科事典を作ることを目標にしたい。5年後に創業100年も迎えますし、今はまだ具体的にお話するまでには至りませんが、そのようなことを考えています。

最後は駆け足になってしまって申し訳ありません。時間が無くなってしまいました。索引というものがどれほど重要であるとか、それから参考文献というのがどんなに重要で、それが平凡社の事典だけでなく、平凡社で作っている書籍にも反映しているのだというお話だとか、また百科事典には必ず地図を付けますので、平凡社は他の出版社と違って、地図制作の伝統があるということについてもご紹介したかったのですが、残念ながら、言及する時間がなくなってしまいました。ではこのへんで話を終わりにさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

司会 ありがとうございました。せっかくの機会ですので関口さんにご質問したいという方いらっしゃいましたら、どうぞ。

質問者1 百科事典の著作権というのはどうなっているのでしょうか。執筆者は7000人いらっしゃるということですが、原稿を著者に書いていただくときにそれはどのように考えているのですか。

関口 当然ながら著作権はその著者にあります。編集著作権というのは我々が持つわけですが、著作権は著者にありますから、我々が改訂するときに、必ず著者に立ち返って許可を求めるということになります。7000人やりませう。

質問者2 百科事典で著作権侵害の係争等、かつてあったことはありますか。

関口 要するにこういうことですね。他の方の著作をある程度侵害した記述があって、そのことについて訴えられたかということですね。それはあったと思います。具体的に、今、こういうことがありましたというのはお話できませんけれども、どうしても記述が似てくるんです。何故かということ、原稿の分量に制約が課せられるからです。基本的に原稿の文字数は200字から600字、その著者が著者名を付けて記述をするということになると、非常に難しい状況が起こるのは確かです。ですから、著作権侵害ということは、残念ながら可能性としてあります。ご自分で200字で何が書けるかを想像していただくイメージできると思います。

質問者3 佐藤優さんの文章にあるように、私が子どものころは、中学に入学すると親が買ってくるということがあったと思うけれども、今は、確かにどこのマンションでもこうした書物を置けない状況だと思うのです。個人で買ってくださいのお客さまはどういう方でしょう。

関口 以前はおっしゃるように、特に高度成長のときには家に応接間というのができて、その応接間に鎮座していたのが百科事典とステレオセット、つまり飾ってあるだけですね。外から人が来ると、この家はなかなかのものだ、ということで、そういう人がターゲットになったんです。実際その頃は競うように百科事典が買われていました。ところが今はなかなかそういうわけにはいきません。正直申し上げて、年に500セットというところですよ。お子さんが大きくなったとか、新しく図書館ができたとか、個人でなくても、そういうところがターゲットになろうかと思っています。2007年に平成の大合併などを中心に大きな改訂したときには、編集的にもデジタル化が図られたので、お金がかかったのですが、年間で2000セットぐらい出ましたので、まだまだ改訂すればお客さんがいるのかな、というふうに思っ

ております。

司会 お時間となりましたので質問はここまでにさせていただきます。ありがとうございました。きょうは関口さんのお話を伺っていて、百科事典を作ってこられた平凡社さんの特徴がよくわかったかなと、思います。本作りは信頼性が大切であるということ。そのような風土の中で事典以外の本にも自然と信頼性に対する高さというのが結果的に出てくることを感じました。ちなみに、私たち図書館員は本を選ぶときにいろいろな視点を持っています。索引がきちんとついているかとか、参考文献がしっかりカバーされているか、地図や図版が使いやすいかとか、内容の信頼性とかなどの視点を、図書館として本を選ぶときのポイントとして意識しています。そういう意味では、まさにこの百科事典というのは本の王様だと常日頃感じております。さらに千代田図書館から出版社の特色を知るためのポイントをもう1つお伝えいたします。平凡社さんからは『月刊百科』という雑誌が出されています。これは平凡社さんが発行していらっしゃるPR誌です。出版社が発行する本の総目録や目録、書評や連載小説やエッセイなど読み物などもとても充実しています。最新の出版物の詳しい情報や出版社の特色や得意分野など、本を選ぶときのヒントが満載になっておりますので、ぜひ一度はご覧になってください。千代田図書館には出版社PR誌を約20タイトル以上集めたコーナーがあります。

それでは、これで本日の人文会セミナーを終了いたします。改めまして、大変貴重なお話を聞かせていただきました、関口さんにもう一度拍手をお願いいたします。(拍手) 本日は、どうもありがとうございました。